

TORU TASAI

太細 通 (株)西原研究所

「施主の要望から、一步先の答えを常に持っていること。
その上で内容も、コストも満足させてあげることが大事だね」



太細 通 (たさい・とおる) 建築家

1960年札幌生まれ。国立室蘭工業大学工学部建築工学科卒業。現在株式会社西原研究所代表取締役所長。(社)日本商環境設計家協会 専務理事。港北ニュータウンセンター北エリア開発プロデュース、小港団地開発基本計画、湘南めぐみが丘基本計画、LISH町田の丘ほか、数々の都市開発プロジェクトの計画に携わる一方、Y-HOUSE、SPAZIO DI Arte、仙石原別荘(K邸)などの高級戸建住宅の設計作品も多く、街なみ景観デザイン、建築デザイン、インテリアデザインなど幅広い範囲で高く評価されている。商空間デザインも数多く手がけ、南青山にて設計したGUESTHOUSE(WEDDING)「CONVIVION」が一昨年オープンしている

左上/ CONVIVION夜景。シンプルなモダニズムによる表現 上/ CONVIVIONロビー空間。GUEST HOUSEらしい我が家のような落ち着いたインテリアを表現。正面デスクと椅子はハーマンミラー社製。床はウォールナット無垢材(撮影/ナカサアンドパートナーズ)



左/ Y-HOUSEリビング空間。リビング全体が大きな吹抜け空間となっている。床は自然石(ライムストーン) 下/ Y-HOUSE夜景(撮影/手塚智子)

「手がけた物件を自分の『作品』と考える建築家は多い。そのため、建築家の意向が前面に出てしまい、見栄えはいいが理想の住まいとは違う、ということも起こり得る。そんな建築家主導の家づくりに疑問を投げかけるのが西原研究所の太細通だ。彼のデザインはシンプルでモダン。洗練された空間構成が印象的だ。しかし太細が一番大切にしているのは施主とのコミュニケーション。どんな家にしたのか、そこで何をしたいのか、幾度となく繰り返し返される対話を通じて、理想の家への答えを導き出す。

「お客様の中には、要望がはっきりしていない方のほうが多いんです。しかし対話を重ねることでコンセプトがはつきりしてくる。家づくりは建築家と施主の共同作業によって生まれるものなのです」

しかし施主の要望というのは無理難題がほとんど。そこに最大限に近づけ、さらに対話によって潜在的な欲求をも引き出して形にする。それができるのは多彩なノウハウの蓄積があるからこそ。彼が主宰する西原研究所は、戸建て住宅に限らず、マンションや商業施設など、実に様々なプロジェクトを手がけている。

また設計段階から完成にいたるまでに一度は頭を悩ませるのがコストの問題。「予算が潤沢な物件ほど、結果として大幅なコストオーバーになりやすい」と話す太細は、しかし予定価格に抑えるための努力は惜しまない。

太細がデザインした潔いほどシンプルな家。そこには施主の希望と建築家の熱意が息づいている。

